

歴博 くらしの植物苑だより

第130回くらしの植物苑観察会 1月23日(土)

出土資料からみたツバキ

永嶋 正春(国立歴史民俗博物館)

ツバキは、用材として縄文時代から使われています。その材は、緻密で堅くしかも均質であるため、工芸品や細かな細工物に向いているようです。縄文時代の使用例でよくとりあげられるのは、鳥浜貝塚(福井県)出土の櫛ですが、これはヤブツバキの材を一木から削り出したもので、表面にはベンガラ漆が塗られています。縄文時代前期後半を代表する装身具といえるでしょう。ところで、今回わざわざツバキを取り上げた目的は、このような縄文時代の使用例を列挙するためではありません。出土資料としてのツバキをとおして、古代の人々の精神生活の実態を考えてみたかったのです。その手がかりは、九州地方で出土したツバキ材にありました。

柳町(やなぎまち)遺跡出土の棒状留具

熊本県玉名市の遺跡で、縄文時代から平安時代まで続いた玉名平野の拠点集落跡と考えられています。鍬や鋤などの木製品が数多く出土しましたが、加えて2点の木甲(木製短甲、木製のヨロイ)も出土しています。このうち、2号井戸内から出土した1号木甲に付属していたものが、木製の棒状留具でした。専門家による樹種同定の結果、その棒状留具はツバキ属の材と確認されました。この1号木甲には、漆や赤色顔料の付着が認められたため、私が漆等の調査を依頼されたのですが、トネリコ属のシオジとされた木甲本体部に対してあまりにも小さすぎる棒状留具は、実用上では機能しない形式的な存在としか考えられませんでした。ところが、その棒状留具に文字が見つかったのです。4世紀初頭(古墳時代前期)の文字資料としては、希有の存在となりました。棒状留具は、武具に付けられた呪符、護符と考えるべき状況に至ったのです。

なぜ、ツバキ材なのか

棒状留具には、なぜツバキ材が用いられていたのでしょうか。たまたまの偶然なのでしょうか。思い出されるのは、奈良・正倉院の南倉に伝わる椿杖(つばきのつえ)のことです。ツバキの細い幹を160cmほどの長さの杖としたもので、その外皮上には数色の顔料で装飾が施されています。758(天平宝字2)年正月初卯の日におこなわれた魑魅悪鬼払いの行事に用いられたもので、『延喜式』によれば、卯杖(うづえ)としては他に桃や梅なども用いられていました。『日本書紀』には7世紀後半に卯杖に関する記述があるとのことで、古墳時代にさかのぼっても同様の行事があったものと考えられます。中国では漢代からおこ

なわれていた行事であること、中国原産であるモモは霊力のある存在であったこと、弥生時代の遺跡からもたくさんのモモ核(モモの種)が出土することなどを考え合わせると、そのような中国の風習がすでに弥生時代には日本に伝わっていたものと思われます。日本の気候風土と植生のなかでは、ツバキにもその役割が広がり転嫁されたものと考えるのが自然でしょう。

ちなみに、大和の大神(おおみわ)神社では、現在でも「年の初の卯の日祭(としのはじめのうのひさい)」がおこなわれており、邪気祓いのツバキの木でつくった卯杖が奉納されるとのことです。東京江東区亀戸天満宮の「初卯祭」での卯槌などもこれらの系譜につながるものと考えられています。

ツバキは、江戸初期には園芸用としても大変好まれていました。それは、歴博所蔵の『江戸図屏風』に描かれた江戸城の「お花畑」にもみてとれます。「首が落ちる」との俗信に惑わされることなく、大いに鑑賞してみたいかがでしょう。

【メモ】

次回予告 第131回くらしの植物苑観察会 2010年2月27日(土)

「造花にこめられた春の祈り」 松尾 恒一(当館研究部民俗研究系)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料